

E-15 集合住宅居住者の住環境に対する総合的住意識の調査研究 (才4報)

名古屋女子大 ○大野庸子 山田家政短大 志水暎子
すみれ女子短大 島田裕子 泉谷秀子

目的 才3報までに得られた結果から考察すると設計、室内環境、室外環境に対する不満の多くは設計、施工法を変えることによって改善され得ることであり、実際多方面にわたって住環境改善の技術的、経済的対策が研究されているが早急な解消は困難である。

しかし住宅内発生源については居住者の住み方によって改善される余地が多く、近隣関係にも影響をおよぼすと思われるのでこれに関する意識と対処の仕方について研究する。

方法 才1、才2、才3報と同じ。

結果 家族構成が夫婦だけの場合はその他に比べて家具・椅子・足音・とびはねる音に対して感受性が強く「非常に気になる・気になる」が3割強。病人・乳幼児・受験生・夜勤者は3割が音を気にしており特に夜勤者は昼間就寝する関係上給排水音を、病人は玄関扉の音を各5割が気にしている。最上階・中階・1階と音源との関係では、最上階は音の被害が最も少ない。玄関扉の音、家具・椅子・足音等、ピアノ・ステレオ等の音は中階が気になる割合最高を示す。音が最も気になるのは1階で給排水の音5割、階段の足音、家具・椅子・足音等、便所の行為音各3割。一般に下階程音の影響は強い。また3階建、4階建、5階建、11階建と高層層になるほど1階が受ける被害は大きくなる。

対処の仕方は半数が「がまん」しており、窓を閉める等の自衛手段を講ずるもの1割。管理人に申出る、苦情を言う等約2割、しかしピアノ・ステレオの音には厳しい対応を示し35割が意志表示をしている。注意行動、消音工夫は約半数が実践しているが、無関心層の注意を喚起する居住者の積極的な対策こそよりよい近隣関係醸成への要件と思われる。